

News Letter

自治医科大学附属病院 卒後臨床研修センター

令和
7年
11月

こんにちは。こちら栃木は朝晩ぐっと寒くなってきました。みなさん体調は大いじょうぶですか？さて、今月もNewsletter 第87回配信です。

【診療科紹介 形成外科】

今回は、自治医科大学形成外科について紹介させていただきます。

形成外科は、先天あるいは後天的な身体外表の醜状を対象として、外科的手技により機能・整容性を正常化する科です。顔面骨骨折・手指切断・熱傷といった外傷、唇顎口蓋裂・耳介形成異常・多合指症といった先天異常、悪性腫瘍切除後の再建（主に乳房と頭頸部）、瘢痕拘縮・ケロイド、リンパ浮腫、慢性潰瘍（糖尿病性足壊疽・褥瘡）など、非常に広い分野をカバーしていますが、自治医科大学ではその全ての領域を経験することができます。

形成外科の専門領域としては、「頭蓋顎顔面外科」「美容外科」「小児形成外科」「再建・マイクロサージャリー」「手外科」「創傷外科」「熱傷」「皮膚腫瘍外科」の各分野に指導医制度が導入されており、形成外科専門医を取得した後に、各々の興味やライフスタイルに合わせて専門領域を選択することが可能です。また、出産・育児との両立が可能な数少ない外科系診療科であることから、近年は女性医師が非常に増えていることも特徴です。

自治医科大学形成外科固有の特徴としては以下のことが挙げられます。

- 同じ敷地内に自治医科大学とちぎ子ども医療センターが併設されており（小児形成外科を標榜）、大学病院にしながら唇顎口蓋裂・頭蓋骨縫合早期癒合症・四肢先天奇形などの小児先天異常症例を数多く経験することができます。
- 乳房再建、リンパ浮腫手術をはじめとするマイクロサージャリー（顕微鏡下手術）を年間を通じて定期的に施行しています。繊細な血管吻合や組織移植の技術を直に見て学べる機会が多く、将来再建外科を志す方にとっても貴重な臨床経験となるはずです。
- 美容外科も標榜しており、大学に所属しながら美容外科領域の研修を受けることが出来ます。また、希望があれば後期研修医のうちから美容外科で外勤することも可能です。
- 形成外科としては国内有数の研究費を獲得しており、再生医療をテーマとした複数の研究プロジェクトが進行中です。大学院や社会人大学院を経て、海外の有名大学に留学することも可能です。

学生のみなさん、形成外科に興味をお持ちでしたら、是非一度見学にいらして下さい。医局員一同お待ちしております。



【医師国家試験予想問題】

1. 56 歳の男性。倒れた大鍋の熱湯をかぶって全身熱傷を受傷し搬入された。頭部顔面以外の全身皮膚に皮膚剥脱と水疱形成を認めるが、温痛覚は残存している。鼻孔、口腔内および咽頭に異常はない。四肢末梢で脈拍を触知する。

まず行うべき処置はどれか。

- a 気管挿管
- b 抗菌薬の大量投与
- c 乳酸リンゲル液の点滴投与
- d 両上下肢皮膚の減張切開
- e 線維芽細胞増殖因子の局所投与

正解：c

- a 気道熱傷を疑う所見がないことから、現時点では必要ない。
- b 耐性菌発生の観点から受傷後初期における抗菌薬の予防的投与は推奨されていない。
- c 重傷熱傷では急激に血管外への漏出が起こり、血管内脱水が惹起されたため、初期治療として輸液による循環血液量の確保が必要となる。輸液の種類は乳酸リンゲル液などほぼ等張の電解質輸液から開始することが推奨されている。
- d コンパートメント症候群による末梢循環不全は起こしていないため、必要ない。
- e II 度熱傷の局所治療として推奨される治療ではあるが、まず行うべき処置ではない。

2. 10 歳の女兒。バスケットボールの試合中に相手の肘が目当たった後、嘔吐を繰り返したため、救急搬送された。診察時嘔気の訴えあり。活気はないが指示には従える。

血圧：88/50、脈拍：50 回/分、SpO2：99

次に確認すべき所見・検査を2つ選べ。

- a 眼球運動
- b 髄液検査
- c 頭部 CT
- d 眼底検査
- e 心電図

正解：a, c

眼球打撲後に嘔吐・嘔気・徐脈をきたしており、典型的な絞扼型眼窩底骨折によって生じる眼心臓反射の所見と考えられる。眼球に強い衝撃が加わった場合、脆弱な眼窩下壁・内側壁に骨折を生じることがある。成人の場合は眼窩底が抜けて、いわゆる眼窩吹き抜け骨折（国家試験頻出！）となることが多いが、小児の場合は線状若木骨折に下直筋が絞扼されて、眼心臓反射による迷走神経反射症状を呈する。眼球の上転障害を認めれば診断は容易だが、嘔吐している小児患者の診察は困難なことも多い。画像上骨折線がわかりづらいもしくは確認できないことも多いが、典型例ではCTの冠状断で下直筋が消失したように見える（missing rectus sign）。しばしば脳振盪と誤診されるが、受傷後24時間以上経過すると下直筋が壊死して不可逆的な上転障害を生じるため、見落とさないよう注意が必要である。